

# グラフィックシラバスの共創を通じた教員と学生の授業改善

Class Improvement through Co-creation of Graphic Syllabus by Teachers and Students

豊浦 正広<sup>†</sup> 根岸 千悠<sup>‡</sup> 日永 龍彦<sup>†</sup> 森澤 正之<sup>†</sup> 埴 雅典<sup>†</sup>

Masahiro TOYOURA<sup>†</sup> Chiharu NEGISHI<sup>‡</sup> Tatsuhiko HINAGA<sup>†</sup>

Masayuki MORISAWA<sup>†</sup> Masanori HANAWA<sup>†</sup>

<sup>†</sup>山梨大学

University of Yamanashi

<sup>‡</sup>大阪大学

Osaka University

〈あらまし〉 教育内容の保証のために、各科目の教授内容に対する整理・見直し・改善は重要である。そのためにはまず、各科目の教授内容を書き表した**シラバス**がよく記述されている必要がある。本稿では、被教授者である学生の観点をシラバスの改善に活かすための実践を報告する。シラバスの要点を絵に描き表す**グラフィックシラバス**に着目し、教員と学生によるグラフィックシラバスの共創を通して、シラバスの記述と授業内容そのものを見つめなおす機会を持った。

〈キーワード〉 授業設計, 授業分析, FD, 学生FD, 協調学習

## 1. はじめに

教育の実質化やディプロマポリシー達成の保証などが大学教育に求められている。教育内容の保証のために、各科目の教授内容に対する整理・見直し・改善は重要である。そのためにはまず授業内容を書き表した**シラバス**はよく記述されている必要がある。しかしながら、教授法の専門家でない授業実施者がシラバスをよく記述することは容易ではなく、専門性の高い教授内容を授業実施者以外の者がシラバスの内容を見直すこともまた容易ではない。

学生の意見を教育改善に取り入れる**学生FD**の活動の中で、既習授業のシラバスの記述が実態に即しておらずに不十分であったとの指摘が学生からあった。他方で、受講者学生は教授される内容の専門家ではなく、「多くの学生はシラバスを注意深くもしくは完璧に読まない」との指摘(Nilson 2007)もあることから、学生自身によるシラバスの改善もまた容易ではない。

教員と学生の直接対話によるシラバスの改善も考えられるが、教授者と被教授者では主従の関係になってしまい、また、すでに体裁の整っているシラバスに対しては、忌憚のない意見が出ないのではないかと考えた。

そこで我々は、シラバスの要点を絵に描き表す**グラフィックシラバス**に着目した。グラフィックシラバスは、授業における重要概念間の系統性・関係性を図示化したものである。グラフィックシラバスの作成を通して、教授内容をゼロから見直

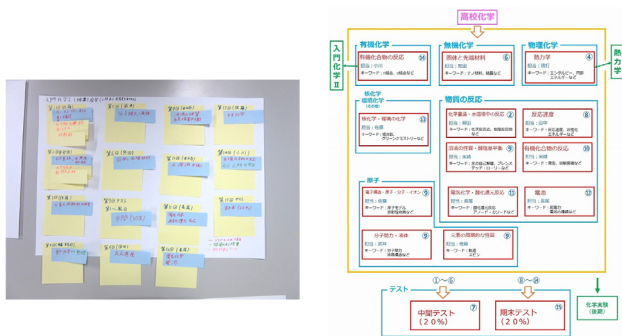
す過程の中で、教員と学生が対等に議論できる機会を持つことを期待した。

## 2. 学生によるグラフィックシラバスの作成試行

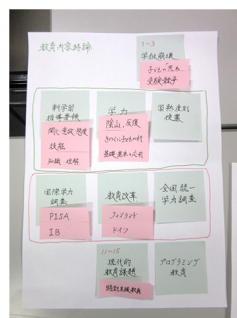
授業の教授内容を完全に理解するためには、その背景にある学術知識までを必要とするために、単に受講して単位を取得した学生にグラフィックシラバスの作成が可能であるのかが疑わしいと考えた。そこで、学生FDに参加する学生6名の協力を得て、学生によるグラフィックシラバスの作成を試行した。

1. 受講済みの授業を1つ選び、提供されているシラバスと授業資料などを用意する。
2. グラフィックシラバスの概要(佐藤 2010 より該当部分15頁)を読み合わせる。(30分)
3. シラバスと授業資料などを参考にし、重要と考えるキーワードを付箋に書き出して、大きな紙の上に配置する。(30分)
4. 相互に作成内容を確認する。(10分)
5. 付箋を並べた上で枠や文字を加えて、グラフィックシラバスの下書きを作成する。(30分)
6. 相互に作成内容を確認する。(10分)
7. スライド上に電子的に書き起こす。

上記2から6について、一室に集まって共同作業をした。図1に6と7の例を示す。各授業回の概要と授業回同士の関係について描き表されていることが確認できた。



(a) 入門化学 I



(b) 教育内容特論

図 1 グラフィックシラバス作成の事前試行例. 左: 共同作業までの下書き, 右: 清書されたもの.

### 3. FD ワークショップ

17名の教員と4名の学生が参加し、各参加者にはグラフィックシラバス作成の対象となる文章によるシラバスを持参してもらった。学生についても、2.で作成したものとは異なる授業を選んでもらい、シラバスを持参してもらった。参加者は教員と学生が混成となる4グループに分かれた。

会場入り口には図1に示すような事前試行例を掲示して、グラフィックシラバスのイメージが湧きやすくなることを狙った。

グラフィックシラバス作成の目的と具体的手順の説明(25分)の後、ワークショップ(90分、個人-グループ-個人-グループ-振り返り)でグラフィックシラバスを作成した。

参加者はそれぞれ時間内にグラフィックシラバスの概要(2.の手順6に相当)までを完成させた。アンケート結果からは、ワークショップの内容に対して好意的な意見を受けた。教員と学生が混成となったグループワークに関しては、以下のような意見が見受けられた。

- 学生と教員がともに参加するのは、視点が変わり良かった。
- 学生と教員間での授業構造、カリキュラムの構造の捉え方が異なるので、もっと共有する必要があると感じた。
- 学生目線、学習者目線、また教育担当にとっても知識の構造化による有効性を感じました。
- 他の人の考え方を知ることができた。大学教員同士で話し合う機会はそう多くないので。

学生からの新鮮な視点からの意見が交わされ、好意的に受け入れられたことが読み取れる。教員間でも授業内容に関する意見交換がそれほど行

われていないことも示唆され、学生との混成以前に話し合いの場を持つことの必要性が感じられる。

### 4. まとめ

本稿では、グラフィックシラバスの教員と学生による共創を通じた授業改善の実践を報告した。受講後の学生であればグラフィックシラバスの作成は可能であり、教授内容をよく把握する授業実施者もまた短時間でグラフィックシラバスを構成できることを確認した。アンケートの回答から、教員および学生から授業改善が進められたという好意的な意見が受けられた。

実際の授業でのグラフィックシラバスの活用は、今後の課題の一つである。受講者の理解に応じて、さらにグラフィックシラバスを修正し、あるいは、授業内容を継続的に改善することも重要であると考えられる。グラフィックシラバスをシラバス上に掲載すれば、受講する授業の選択の際に受講者に提供できるが、高解像度の画像の貼り付けが必要であり、対応できないシステムは少なくないと思われる。システム側の対応も課題となる。

### 謝辞

本研究は、山梨大学平成30年度教育関連プロジェクトの助成を受けたものである。

### 参考文献

- Linda B. Nilson (2007) The Graphic Syllabus and the Outcomes Map, Jossey-Bass  
 佐藤 浩章 (2010) 大学教員のための授業方法とデザイン, 玉川大学出版部